

直接参照した文献

- 浅見 忠彦(1962) 太平洋南区のカタクチイワシ Engraulis japonica (HOULTUYN)に関する研究。南水研報(16)
- 服部 茂昌(1964) 黒潮ならびに隣接海域における稚魚の研究。東水研報(40)
- 中井甚二郎ほか4氏(1955) 昭和24年~26年鯉資源協同研究経過報告。東海区水研
- 中井甚二郎ほか8氏(1962) イワシ類後期仔魚の食餌と加入量との関係。昭和36年度水産資源に関する共同研究推進会議報告書。農林水産技術会議
- 静岡県水産試験場(1964) 黒潮流路と沿岸漁況の変動について。静岡漁連技術普及資料(1)
- 東海区水研、鯉資源科(1958) 昭和32年春季遠州灘沖を中心とする海域に起つたプランクトン分布、カタクチイワシ産卵ならびに漁況の異常について(概報)。漁海況予報調査〔東海、東北海区漁況関係〕昭和32年中間報告(騰写)
- 東海区水研、鯉資源科(1959) 遠州灘を中心とする海域における1958年早春季の環境、カタクチイワシ産卵と漁況について、概報。重要沿岸資源調査研究並びに漁海況予報調査に関する報告(速報) (騰写)

3 討 論

質問 宇田：沖合海流とシラスの分布、量との関係はどうか。特にシラスの漁獲量中沖合流入シラスの混入率はどうか、又黒潮のヘリのシオザカイでの採集量との関係は？

答 服部：黒潮の最高水温帯よりも、むしろそれより内側の水温のやゝ下る強流帯に分布の濃密地点がみられる。沖合から漁場に供給されるシラスの量については環境の変動に対応して年により、又季節によつて大きく変動しており、特に春と夏以後では産卵場所が大きく変化することもあつて、供給のされ方が異つている。これらの問題は現在の調査網では十分でないが、目下現在までの資料を整理している段階である。

質問 宇田：降雨量と漁獲量、シラス生残量との関係(正相関)は全国的か。

答 林：降雨量と漁獲量との統計上の正相関は遠州灘では全体としても、静岡、愛知両県に分けても認められている。九州東岸については浅見技官に願する。

答 浅見(南海区水産研究所)：南海ブロック内の各試験機関でシラス漁況と降雨量の関連について検討しあつたことがある。それによると、各地共通した結果は出なかつたという記録がある。降雨量と産卵量については検討していない。なお紀伊水道については徳島水試の土肥氏に願する。

答 土肥(徳島県水産試験場)：吉野川流域の降雨量の多少と和田島のシラス漁獲量は正相関、里浦のシラス漁獲量とは相関がないことを加藤場長が発表している。

答 平野(東海区水産研究所)：この海域について上原君が調べた結果によると2、3月の流域(面積)における降雨量と正相関がある。

質問 宇田：レーダーを用いると漁船散布位置から好漁場位置とシオザカイ等海況との関係が大へん明確につかめると思うがどうか。

答 林：漁期、漁場を細かくみる必要はある。漁船の分布については漁海況予報調査標本船資料を使つて整理しつゝある。レーダーだけでなく、航空写真なども用いての漁船分布と潮目との関係を見ることはできよう。しかしその資料を研究する方法を吟味することがまず必要である。

問 平野：駿河湾へ沖合からつつかける黒潮反流にカタクチイワシが乗つてくると考えるのか？ 黒潮反流と岸との間の海域にカタクチイワシが生息していて、その分布が黒潮反流の流動や位置の変動によつて変化すると考えるのか？

答 林：カタクチイワシ成魚の大部分は春に湾内へ来遊し、秋から冬に湾外へ出る。この間加入、逸散はおこつている。その分布域は黒潮そのものでなく、その沿岸側に拡がる。かれらの分布はつねに黒潮反流の消長や変動と関係する。

質問（漁業者側へ）、林：石花海のような湾口でも親魚らしいものの漁獲されることがある。漁場、漁期により獲れた魚体の大きさなどの違いというもののみられないか？

答（答なし）……当漁場方面への出漁関係者の出席がなかつた。……

質問 小林（静岡県用宗漁協）：西方から回遊して来るとの説明があつたが、これはわれわれの実際経験とは全く違つている。われわれの経験ではシラスは最初駿河湾中部の興津に漁がありその後3日間程度で西の吉田に、その後御前崎に漁が出、さらに遠州灘の舞阪へと大体西の方へ移るようであるが、どうか。

答 服部：春先きのカタクチイワシの産卵は主に日向灘や四国沿岸など潮岬よりも西方で行なわれ、その海域で孵化した稚魚が黒潮の最強流帯を中心に、潮岬以東に運ばれていると推定されている。私が先程西方から来ると云つたのは、主にこの季節の沖合のことであり、これが沿岸に入ると西向流に送られ、内湾や極く沿岸部では云われる通り東から西に流れる。その場合濁流や乱流があると、そこに一時停滞して、漁場を形成すると思われる。

答 林：晩春以後には関東近海の産卵が盛になり、西向枝流のため東から運ばれ、相模湾は4月、静岡県下5月、愛知県下6月とシラスの漁期が進む。湾内も東側から来遊する。

質問 用宗業者（代理発言、五十嵐静岡水試場長）：舞阪方面のごく沿岸部では東向流があるが、湾内（駿河湾）よりも舞阪で漁期のおくれるわけは？

答 服部：ごく沿岸部では卵も稚魚も少なく、その沖の水深50～70mのところか密であり、西向流で運ばれる途中次第に沿岸の漁場に分れてゆく。そのため舞阪よりも湾内の漁期が早いと思う。

答 林：卵から孵化した稚魚がシラス漁場までに進み行く移動状態などについては今後の調査や検討にまつところが多い。シラス、成魚に関する海況、漁況の総合的な要因構造の解析がまだ不十分な段階で、今後水揚地別漁獲量資料から漁場別漁獲量へ、さらに漁業海図へと進めて行き、カタクチイワシの生活内容の実体を把握する方向に持つて行き度いと思う。

社会 中井：現在までの資料には、「産卵量からのシラス漁況予測」と「後期仔魚の餌の量や降雨量からのシラス漁況予測、すなわち所謂補充機構研究結果」との間の一見矛盾の問題もあり漁況とシラスおよび成魚の漁況予測の問題も検討の余地が残されていると思う。しかし残念ながら予定の時間も過ぎたので不十分ながらこゝで一応打ち切りこれらの問題は今後の検討にまつこととした。

ii) カツオ、ビンナガの回遊経路に関する問題

コンビナー 岩下 光男 (東海大学海洋学部)

話題および話題提供者

本年度カツオ漁況について 田中 有 (東北区水産研究所)

本年度ビンナガ漁況について 岩崎 行伸 (東海大学水産研究所)

太平洋におけるカツオ資源構造について 川崎 健 (東海区水産研究所)

黒潮の流れを基盤として考えたカツオ、ビンナガの回遊経路

木村 喜之助 (東北大学農学部)

海洋学的にみた、カツオ、マグロ資源及び漁場の新見解

宇田 道隆 (東京水産大学)

1 本年度のカツオ漁況について

田中 有 (東北区水産研究所)

1) 本年度のカツオ漁況について

伊豆海域で本格的な操業がみられたのは4月下旬になつてからであつた。漁場形成場所も例年と異なり、青ヶ島から新里瀬に形成された。例年ならば黒潮流域の北側の潮境に形成されるが、今年はずいぶん漁場形成に至らなかつた。そして例年見られる年魚(体長モード43~45cm)は全く少く、体長50cmにモードを持つ魚群(たぶん4年魚と思われる)のみであつた。日本近海に來遊する魚群の中で、來遊主群と云われる3年魚が東北海域でも非常に少なかつた。この様な年は過去にあまり例がない。もう一つ特徴としてあげられるのは3年魚以下のカツオの出現が7月上旬より見られた事であろう。東北海域の夏期漁場は 150°E 以西に、若年魚 150°E 以东に4年魚と云つた漁場形成が見られた。

來遊主群であるところの3年魚が少なかつた事が不漁の1要因であろう。

2) マリアナ海域及び南洋カツオ

例年ビンナガ漁が終了すると7月下旬より延縄に切替えたカツオ船は、最近延縄漁の不振 etc. により本年度は延縄出漁船は皆無であつた。静岡、鹿児島県船は7月上旬より、三重県船は10月より南方に出漁したが、昨年好漁が見られた10月~12月は不調であつた。

本年度の漁況を順に説明する。